

## 2018 年度立命館附属校・提携校 国語科授業研究会《技の習得》

附属校教育研究・研修センター

12月15日(土)朱雀キャンパスにおいて、国語科授業研究会《技の習得》を実施した。

講師に立命館大学教職研究科教授 井上 雅彦 先生を迎え、テーマは「アクティブラーニング型国語科授業のカリキュラムデザイン」、参加者9名(立命館中高1名、立命館宇治中高2名、立命館慶祥2名、立命館守山2名、立命館小学校2名)で行われた。

現在、国語科は大学入学共通テストの記述式問題導入、高等学校学習指導要領の大幅改訂など、急激な変革が求められている。この変化に対応するためのアクティブラーニングのとらえ方について、事例にもとづいて学び、考える貴重な機会となった。

### 【研修の概要】

研修は先生がご用意された50ページ近いレジュメに沿って進められた。その内容すべてを詳細に記載することはできないが、項目に沿って概要を紹介する。

#### 1. 大学入学共通テスト

モデル問題を解くためにはどのような力を身につけさせることが必要か→答えは次期学習指導要領に

#### 2. 次期学習指導要領の背景

「キーコンピテンシー」(OECD)／「社会人基礎力」(経産省)／「21世紀型学力」(文科省)  
の方向性はほとんど同じ＝世界的潮流

#### 3. 次期学習指導要領の方向性

「何を教えるのか」(コンテンツ)から「何ができるようになるか」(コンピテンシー)への転換  
→アクティブラーニングの必要性

#### 4. 次期学習指導要領への対応

現行学習指導要領の「言語活動」を充実させること→言語活動重視の単元構想が必要

第1次 言語活動全体の見直し／動機付け

第2次 教科書教材を目的をもって読む／教科内容の「習得」・「読むこと」領域の指導

第3次 自分の表現に適用する／教科内容の「活用」・「表現」領域の学習活動へ＝言語活動

#### 5. 「水の東西」のアクティブラーニング型授業づくりと評価

高校定番教材「水の東西」の単元構想→「起承転結」「対比」の構造をとらえ(第1～2次)、その技術を用いて「私の文化比較論」を書く(第3次の言語活動)

#### 6. アクティブラーニングの評価

アクティブラーニングにはパフォーマンス評価、形成的で多面的な評価が必要

最後に、井上先生ご自身の実践例をご紹介いただいた。高校1年「国語総合」において、言語活動を重視した単元が系統的に配置されている緻密な年間計画であった。10数年前の実践とのことだが、アクティブラーニングの実践として、きわめて完成度の高いものであった。研修終了は所定の時間を少し超過し、約2時間40分休みなく続けられた。講師、参加者ともに熱意にあふれた研修であった。

(記録：附属校教育研究・研修センター三浦 誠)

